

狭山池1400年と東除川・西除川

松原歴史ウォーク

vol.224

西田 孝司 (松原市文化財保護審議会)



▲西除川の付け替え地
(天美南6、北新町4丁目) 北新町・高木橋から西へ流路が変更された。後方は天美の油上・芝・堀墓地。



▲東除川と落堀川の合流点
(大堀4丁目) 後方は大堀八幡宮の旧社地。東除川は今では西へ延長され、瓜破(平野区)で大和川に合流する。



▲昭和30年頃の東除川と大和川の合流点(松原市全図) 大和川と同時に新設され、平行して東から流れる落堀川を合わせて、大和川に入る。

行基・重源・安見や慶長の改修 狭山池が源の東余下・西余下

南河内の水がめである狭山池(大阪狭山市)の築造は、発掘された東樋樋管のコウヤマキの年輪年代測定法から、飛鳥時代の六一六年頃と推定されています。羽曳野丘陵と泉北丘陵に挟まれた谷地形を南から流れてきた天野川(西除川)や三津屋川を東西の築堤によってせきとめた日本最古のダム式ため池です。

奈良時代前半、東大寺の大仏づくりに関わった行基は天平三年(七三一)、狭山池の改修を行いました。天平宝字六年(七六二)の長雨で、狭山池の堤が決壊したので、延べ八万三千人の人々を動員して修造しています。鎌倉時代に入り、源平合戦で火災にあった東大寺の復興に尽力した重源も建仁二年(一一二二)に狭山池改修を行いました。その時の改修碑が見つかっています。

戦国時代の永禄年間(一五五八～七〇)にも、河内国守護の畠山氏の配下で、飯盛城(四條畷市)を本拠とした安見美作守宗房が改修に着手しましたが、戦国の動乱の中、完成しないまま中断したこともあったようです。

江戸時代初期の慶長十三年(一六〇八)、豊臣秀頼の重臣であった片桐且元は、林又右衛門・小嶋吉右衛門・玉井助兵衛を普請奉行として、樋大

工である摂津の小和田宗右衛門と小和久兵衛に命じて新樋(尺八樋)を設置させています。この時、工事の行われた西樋の板に銘文を書き付け、天平三年に行基が池をつくり、一〇〇年以前に安見美作守が改修に着手したが、中断したことも記しています。慶長の改修の結果、池の貯水量も増え、下流の松原市域などの村々にも西除川やその時、人工水路を新設した東除川を通じて、いっそう灌漑システムが図られるようになりました。

河内の三大地誌のうち、『河内鑑名所記(延宝七・一六七九)』は、丹南郡に「狭山池、そこに石の樋有、行基菩薩の作なり。尺八樋八慶長の比小和田久兵衛作也。天下ニおゐて是尺八樋の初りとそとあります。

『河内志(享保二十・一七三五)』には、「東渠 源、狭山池より流て」「西渠 また狭山池より流て」とあり、東除川を東渠と記し、水源を狭山池とします。また、西除川は西渠と書き、やはり狭山池を源とするのとあります。狭山池に關しては、「狭山村、錦部郡天野・小山田二溪」とあり、上流が天野川・小山田川としています。

『河内名所図会(享和元・一八〇二)』は、「東余下川 水源、狭山池より流れて…一名、東渠といふ」とし、「西余下川 水源、狭山池より流れて…一名、西渠といふ」とあり、東余下・西余下の表記を使っています。狭山池は「錦

部郡天野、小山田の二溪、ここに流れて池となる」として、『河内志』と同様です。

東除川は、もともと富田林市甘山付近を源として北流し、狭山池には流れていませんでした。それを、慶長の改修で東余水吐をつくって、人工水路を設けて羽曳野丘陵を流れる東除川と結びつけたのです。丹南郡から市域の丹北郡一津屋村・小川村を経て大堀村で、これまで現大阪市域方面に流れていた流路が宝永元年(二七〇四)に柏原から堺方面に付け替えられた大和川にさえぎられたので、大和川と合流するようになりました。その合流点に大堀村の八幡宮が鎮座していましたが、神社は平成二十七年に恵我小学校の南西側に遷座しました。

西除川は、天野川が狭山池に流入した後、西余水吐より流れでる河川です。今では河川法上、天野川も狭山池も西除川とよばれています。丹南郡や八上郡を経て丹北郡に入りますが、やはり大和川で絶たれたため、新川の手前、市域の丹北郡堀村と高木村の境で西に川違いされ、摂津住吉郡の浅香山村(塚市)で大和川に合流させられました。

今年、狭山池築造一四〇〇年になるということで、さまざまな催しが行われており、あらためて東除川・西除川を含めて脚光をあびています。